

雑歌 : 文苑

著者	奇熊, 基紀, ?泉
雑誌名	龍南會雑誌
巻	6 4
ページ	8 6 - 8 7
発行年	1898-03-30
その他の言語のタイトル	雑歌 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5082

題えらす

龍田山たつ春風に世の中の人々の心を吹かせてしな
か阿蘇かねの風吹きあれて飽田野の里わの梅にふる霞かな

評曰、これらを見挫棘さやいふへからん

紅葉か丘にて會えけるに師の君のおそかりければ

春の日のな。かしどもなし師の君を心々に待ちわひをれば

雑歌

折にふれて

浦鹽の浦風までも敷嶋の大和の春はのとけからまま

評曰、外國人の方より讀める様なり

新年雪

のどかにも積る雪かなあま玉の年立つ朝は風たにもなく

若菜

春の野に若菜摘にとゆく子らの心やいかにのとけかるらん

春興

のとけまや霞の奥に行きくれて花の影かる春の心は

曉霞

溪川

桃江

奇熊

基紀

清泉

たしなへて幾重ともなく野も山も霞こめたり春の曙
尋花

鶯に今日さそはれて春の野の花より花を尋ね行く哉
とめこよとわれ待つ人は片山の垣根の梅の主なりけり
春來れば里の犬追ふ童さへ梅の花かささして行くなり

歸雁

かへる雁わすれな果を歸るとも心つくまの春の曙

感

時しわれは雁も越路にかへるなりいかてか人の行き迷ひける

師の君にあひて紅葉山の會ありと聞きて

紅葉山今日のまどひを知りもせは訪はんと人に契らしものを

荷馬を見て

何よりもわきてあはれに覺ゆなりむちうたれつゝ走るやせ駒

漢詩

晚春郊行

富米野樂山人

十里長堤望欲迷、斜陽影裏路東西、遠村嫩綠春如夢、對雨峰懸含雨低。

聞鶯